





図1 《南海日日新聞》1975年2月15日

でレコードが出る唄者は、それまで民謡大会などで名を知られた唄者に限られていた。逆に言えば民謡大会に推薦されなければレコーディングのチャンスはなく、優れた唄者でも陽の目を見ない人が多くいると思われていたのである。2月15日の新聞（以下、「新聞」はすべて南海日日新聞を指す）は、「きょうから奄美新人民謡大会」という見出しでこれを報じた（図1）。

そこには「前評判が高く面白い新人大会になりそうだが、既に前売り券は売り切れの状態で混雑が予想されるので、会場整理の都合上入場整理券を持たない人は入場できない」とあり、その人気のほどが窺える。会場は名瀬市中央公民館であった。課題曲の「朝花節」の模範演奏を務めたのは坪山豊だった。

記事にはすべての出場者の名前と出身集落、随意曲の曲目が記載され、これまで島唄の名人大会はあったが、集落の外に出ない唄者の発掘を目指す新人大会はこれが初めてであると強調されていた。出場者の最高齢は76歳、最年少は小学校三年生だった。大会は二日にわたって行われ、初日の予選で選ばれた15人が翌日の本選に進んだ。本選で最初の「南海日日新人賞」を受賞したのは笠利出身の築地俊造であった。審査員長は「新人賞にふさわしい新しいタイプのウタシャ」と評した。

この民謡大会の特徴は、まず奄美の各集落の唄者を名瀬に集めて競わせたことである。知られるように、島唄の「シマ」は元来「集落」の意味だった。島唄は集落という小世界のなかで歌われてきた「わきゃシマの唄」だったのである。この大会はその集落を代表する唄者を競わせ、その勝者を「奄美」を代表する唄者とした。

その点でそれは「シマ唄」の「島唄」への変容を象徴する出来事であったと言える。大会は79年まで五回続いた（各大会の優勝者は、第二回が泊忠重、第三回が岩切愛子、第四回が清正芳計、第五回が竜山義光）。

第三回大会を前にした1977年3月18日、新聞には第一回と第二回の受賞者である築地、泊の両氏を迎えた対談が掲載された。その対談で築地は、奄美における島唄の現状が活気に欠けることを指摘し、「それにしても、もう少し島で民謡を盛りあげるような企画が欲しいですね。去年は沖縄、鹿児島でばかり歌って……」と述べ、地

元では「市制三十周年のときに歌ったぎりでした」と振り返った上で、「奄美大島自体島歌に対する盛り上がりはまだ十分でないと思います。ですから新聞社などが中心になって特に若い層にとけこませる催しものがあったらなあ、というのが希望ですね」と語っている。

これには泊も「後が続くひとたちが少ないですね。そういった意味では新人大会などを通じて層を厚くしていく、ということは大切なことだと思いますね」と同様の感想を述べている。

今日の島唄を取り巻く状況の賑わいと比べると、まさに隔世の感がある。

## 奄美民謡か、島唄か

この状況を大きく変えたのが、1979年10月27日に日本武道館で行われた「第二回民謡大賞全国大会日本一決定戦」での築地の優勝だった。翌28日の新聞は「奄美民謡、日本一に」と大きく報じた(図2)。帰島した築地は30日の新聞でこう語った。「感情をこめて唄ったのがよかった。まだ私の唄は未熟で、これから会得しなければならぬことばかりですが、奄美の民謡が日本一に選ばれたことで、若い人たちの励みになればと思っている」、「日本の片隅である奄美に、こんな歌があったということを少しでも多くの人にわかってもらえただけでうれしい」。

11日には、「大忙し『民謡日本一』」の見出しで、テレビや宴会に引く手あまたで本業もままならぬ築地の姿が伝えられた。翌1980年元旦には、「新春座談会」として、築地と民謡研究家の小川学夫との座談会が掲載される。築地はそこでこう言っている。

私の場合、少なくとも伝承ということから考えますと不幸だった。そういう環境の中では育ったものの、島唄についてはウタシャたちから伝承されてはいない。だから東京の武道館や県の文化センターで歌っている私の唄を、郷里笠利町川上で、八十歳のじいちゃんと一緒に歌うと、どこかが違う。本当の島唄を習っていないからです。だから不幸な育ち方をしたと思うんです。(……) 昔はひとつのシマ(集落)単位で、シマの唄がありました。ヒギヤ唄とか。住用でのことですが、私たちの唄を熱心に聞いた



図2 《南海日日新聞》1979年10月28日

後で、九十歳くらいのおばあちゃんが、「ト、コンドヤ、シマヌウタ聞カシンニ」。このおばあちゃんがいったシマヌウタが、本当の意味での伝承された島唄ですよ。私たちの時代は島唄の窓口が広がって、自分のシマの唄を伝承し、受け継いでいく術（すべ）を知らずにきてしまった。悲しむべきことですが、反面、いつまでもその島のその人の唄ばかり歌っていたのでは、島唄は「生きている」といえないのではないのでしょうか。（……）私は、非常にヤバいことをやってしまったような気がするんです。私の唄は“島唄”ではなく、奄美民謡という気がするんです。それがテレビの波に乗って放送され、そういう奄美民謡が大衆に普及し、島の人々がそういう傾向になっていくと、伝承された古来の島唄は、ブラジルでも行かなくては聞けないようになるかもしれません。

ここでの築地の懸念は二つある。ひとつは、自分が歌う唄が集落の伝統を受け継ぐ正統的な「シマ唄」ではないにもかかわらず、島唄の代表のように扱われていること、いまひとつは、その島唄の正嫡ではない唄が民謡日本一になって皆に真似されてしまうと、奄美島唄全体がおかしくなるのではないかとということである。

この懸念は築地の個人的な事情を越えて、島唄の未来にかかわるものであった。すなわち、島唄か、奄美民謡か。あるいはシマ唄か、島唄か。奄美島唄は以後この二つの極の間で揺れ動いていくことになる。

司会を務めた南海日日新聞社の前田勝章編集局長は、座談会をこう締めくくった。「島唄が減びて、奄美民謡が島の独特の歌謡として生き残る。それもいいではありませんか。歌は世につれ、世は歌につれといいますから。ではこのへんで……」。

それにしても、早くから故郷を離れ、「わきヤシマ」の唄を持たないことへの後ろめたさを隠さなかった築地が、奄美新人民謡大会と日本民謡大賞という奄美と全国の両方の大会で優勝したことは、きわめて象徴的である。しかも前者の大会では、耳の肥えた審査員から「新しいタイプの唄者」と歓迎されさえたのである。

築地の懸念とは別に、島唄は確実に新しい時代へと足を踏み出していたのである。

## 奄美民謡大賞

民謡日本一の影響はすぐにコンクールに現れた。「奄美新人民謡大会」は、翌年から「日本民謡大賞」の前哨戦として「奄美民謡大賞」へと改称される。当時の参加者募集広告にはこうある。

南海日日新聞社では、過去五回奄美民謡新人大会を開催し、幾多のすぐれた唄者を送り出してまいりました。中でも第一回の新人賞受賞者築地俊造氏が、昨年度の日本民謡大賞で日本一となったことは、皆さま周知の通りであります。ここで大会の目的である民謡普及をさらに推進するために、本年度よりベテランも、新人も参加できる大会へと輪をひろげ、さらに日本民謡大賞鹿児島予選大会出場者選抜大会も兼ねることとしました。

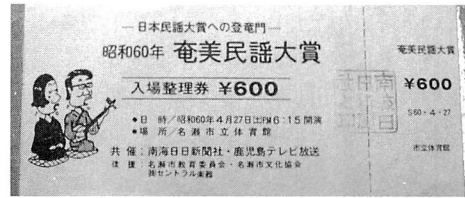


図3 奄美民謡大賞の入場整理券 (1985年)

新しい大会は新人の発掘のみならず、民謡日本一に挑戦する唄者を選ぶ場となった。こうして大会の出場者募集広告には、「日本民謡大賞への登竜門」という新たなフレーズが付け加えられることになる (図3)。

第一回大会 (80年) は参加者26名で行われ、坪山豊が大賞に選ばれた。坪山は過去五回の奄美民謡新人大会で基準歌唱を担当し、昭和48年にはセントラル楽器からレコードも出した実力者で、「ワイド節」の作曲者としても有名であった。受賞を伝える記事は言う。

父親もよく知られた唄者で、豊少年も幼い頃から無類の唄好きであった。ところが青年時代に島唄から遠ざかる決心をする。というのは父親のケタはずれの唄好きをまのあたりに見ていたので、島唄が自分の仕事の妨げになることを恐れたからであった。それから二十数年のブランクがあって、時折、坪山さんが口ずさむのを聞いていたある人から、無理矢理、大会にかつぎだされたわけである。結局それがきっかけで本人もやる気を出し、めきめき実力をあげていった (1980年4月1日、以下日付は80.4.1と略す)。

知られるように、この受賞をきっかけとして坪山は奄美の代表的な唄者になる。逆に言えば坪山ほどの実力者でさえ、コンクールをきっかけに「無理矢理」引っぱり出されたのである。唄者の発掘という点でコンクールが果たした役割は、決して小さなものではなかったと言わなければなるまい。

さて、第二回大会 (81年) の出場者募集広告には、「第二の築地俊造” 出てよ」と

いう文字が踊り、前年度の大会が回顧されて、「残念ながら日本武道館での本選大会出場は果たせなかったが、今年は是が非でも本選へ進出し、願わくば島から“第二の築地俊造”を出したいところ」と書かれた。この大会にはゲストとして第一回日本民謡大賞受賞者の小野花子さんが招かれた。民謡日本一のインパクト、いまや醒めやらずというところか。しかしこの年は35名の参加者があったものの大賞は出なかった。なお、この大会では、初出場の中野律紀が少年の部でKTS賞を獲得している。

第三回大会（82年）は、泊忠重が新人大会に継いで大賞を受賞する。また中野律紀や西和美がKTS賞を受賞している。参加者は26名であった。第四回（83年）は、大賞はなかったが、安原ナスエが新人賞、中野と清正芳計が三年連続でKTS賞を受賞した。出場者は27名で、少年が1名、青年が7名、壮年が19名と出場者の大半を壮年が占めた。

第五回（84年）は安原ナスエが大賞、西和美が新人賞、初出場の柳信一が少年の部でKTS賞を受賞した。第六回（85年）の参加者は24名で、少年が6名、青年が5名、壮年が13名だった。大賞は前年度新人賞の西和美だったが、審査員長の恵原義盛は講評で、「とくに少年、青年が上達して大人でもかなわないぐらいだ」と述べた。

第七回（86年）は大賞がなく、第八回（87年）大会からは本選の前日に予選が行われることになった。「これまでの大会が一応のレベルに達した一面、新人唄者たちが気軽にノドを競えなくなった」という理由からであったが、その効果か38名の出場者の大半を新人が占めることになった。大賞は清正芳計で、少年の部に中野律紀、竹島信一、里あんな、皆吉恵理子の4人が出場し、少年の部で優勝した竹島が鹿児島大会でKTS賞を受賞した。

第九回（88年）からは、会場が名瀬市立体育館から奄美振興会館に移る。この回は大賞がなく、当原ミツヨが新人賞を受賞した。第十回大会（89年）も大賞はなかったが、KTS賞を受賞した当原ミツヨが、そのまま全国大会に進んで日本民謡大賞を受賞し、奄美では築地俊造以来二人目の民謡日本一になった。なおこの大会では少年の部に貴島康男が初出場し、KTS賞を受賞した。第十一回（90年）は当原が大賞、中野律紀が新人賞であったが、中野はその後全国大会に進み、当原に続いて日本民謡大賞に輝いた。奄美勢の二年連続の快挙であったが、このことはまた後で詳しく触れよう。

第十二回（91年）では、予選と本選が同日に開催されたが、予告記事には「大会から、過去3人の民謡日本一を輩出しています」という文字が踊った。この大会の大賞は森山ゆり子で、新人賞に貴島康夫が選ばれた。なお中学一年の元ちとせはこ

の大会が初出場であった。第十三回（92年）は受付開始から50人以上の応募があり、先着順に35人が出場したが、大賞は出なかった。それ以外の賞は、新人賞が皆吉恵理子、特別賞が貴島康男、奨励賞が元ちとせと若手が並んだ。審査委員長の築地俊造は講評でこう語った。

今年は皆さん歌がうまくなっていて、審査員泣かせだった。特に少年の部。本選ではシマ一番のおほこをそれぞれ歌いこなしていた。ただ、うまくなり過ぎ、技巧に走り過ぎて、個性がなくなったように感じられて寂しい。伝承の場としての「歌遊び」などを通して、個性のある唄を育ててほしい。今回は大賞該当者なしとなった。貴島康男君の「雨ぐるみ節」が全出場者中、点数は一番上。ただ奄美民謡大賞は日本民謡大賞と違う。少年の貴島君は将来の島唄界を背負う人材に育ててほしく、島唄に対する全般的知識などもっともっと勉強してほしいと思い、大賞を見送った。

実際、この時期を境に島唄には若手の活躍が目立ち始める。見出しも毎年のように「若手の実力がアップ」、「著しい若手の台頭」などの文字が踊った。第十四回大会（93年）と第十五回大会（94年）こそ、壮年部の中田和子が新人賞と大賞を続けて受賞したが、第十七回大会（96年）では17歳の元ちとせが史上最年少で大賞を手に入れている。

以後、第十九回（98年）の福山幸司、第二十回（99年）の松山美枝子、第二十二回（01年）の中島清彦と中堅の大賞受賞が続いたが、翌年からは第二十三回（02年）の牧岡奈美、第二十四回（03年）の中村瑞希と、2年連続で青年部から大賞が出た。第二十三回の講評では、審査委員長の築地俊造が「若い人が技巧的にうまくなっている一方、ベテランの唄にメリハリがなくなっているのではないか」と述べた。

その後の大賞は、第二十五回（05年）が皆吉佐代子、第二十六回（06年）が直田ハツ子とベテランの受賞が続くが、それ以後は第二十七回（06年）の永志保、第二十八回（07年）の山下聖子、第三十回（09年）の川畑さおり、第三十一回（10年）の里歩寿（歴代最年少16歳）、第三十二回（11年）の前山真吾と若手の受賞が続いている。

大賞こそ受賞しなかったものの、このリストに第十八回大会（98年）における青年の部・新人賞の里アンナ、第二十一回大会（00年）の新人賞の中孝介、第二十三回大会の少年の部・最優秀賞の里朋樹、鹿児島県民謡王座決勝大会で三年連続で優勝

し、「名人位」（各部門別に三回優勝者に与えられる）を与えられた貴島康男の名を加えれば、若手の充実ぶりはいっそう際立つだろう。

しかしながら、奄美では若者、年輩者を問わず、島唄に関わる人たちからコンクールに対する否定的な意見を聞くことが珍しくない。「歌の良し悪しを決めるのは個人の趣味」という原則論はもちろんのこと、「コンクールのせいであ唄が変わってしまった」、「芸謡化してしまった」という批判も多い。大会二十周年の特集記事にはこうある。

「島唄は本来の古く素朴なままで残すべきだ」と芸謡化に傾斜しつつある現状を指摘する意見もある。大切な意見である。双方両立してほしいが、本来の島唄が生きていた時代と現在では価値観が大きく違い、日常生活の中で力を持っていた方言もすっかり影を潜めている。奄美の文化の特徴は「生活が文化である」という点にあるが、その母体の生活が大きく様変わりしている。こうした中で、奄美の文化を最も象徴しているといわれる島唄の奥深さを保存・継承していくことは容易ではない。各地で各界各層の人々が多様な島唄に関する取り組みを続け、そのことで島やシマ（集落、ふるさと）の深さに触れていく。奄美民謡大賞はその一翼を担う試みであり続けたい、と私たちは願っている（99.5.7）。

評価はさまざまにあり得ようが、若手の活躍に象徴されるように、唄者の発掘と島唄の底辺拡大においてコンクールが果たした役割を過小評価することはできない。単純に出場者数だけを見ても、最初が26名であったのが、2000年には100人を越えている。その後も毎年のように最多記録を更新し、第二十二回が119人、第二十三回が126人、第二十四回には174人、第二十八回大会では200人を上回った。増えすぎた参加者に対処するため、第三十回（09年）からは全国6ヶ所でテープによる予選会を行っている。

毀誉褒貶はあれ、日本の南端の島でこれだけ質の高いコンクールが33回も続いていることは、それだけでも驚くべきことであると言わなければなるまい。

## 民謡日本一

さて、すでに述べたように、築地の民謡日本一をきっかけに始まった奄美民謡大賞は、もともと日本民謡大賞の前哨戦として位置づけられていた。それだけに第二、第三の民謡日本一を送り出すことは、この大会の悲願であった。しかしそれはなかなか



現実にはならなかった。

その願いが叶うのは、築地の日本一から十年後の1988年だった。奄美で二人目の日本民謡大賞を受賞したのは当原ミツヨ。曲は「野茶坊節」であった。10月22日の新聞は、「当原さん見事日本一」という見出しでこれを大きく報じ、鹿児島県知事の祝福の言葉や、地元奄美空港での熱狂的な歓迎ぶりなどを伝えた。その後しばらくは、小学校での島唄の交流会（88.11.17）や総理大臣官邸への招待（89.6.8）など、当原に関する賑やかなニュースが続く。当原はまた、12月に奄美と沖縄の歌の名手が総勢90人集って二夜にわたって行われた「琉球弧の唄と踊りの祭典」を始めとする島唄関連のイベントでも、出演者の目玉として紹介された。

この二人目の日本一の興奮も冷めやらぬ翌89年10月、今度は中野律紀が15歳という史上最年少で日本民謡大賞を受賞する。若くはあったが奄美民謡大賞の常連であった中野は、昭和56年から7回も鹿児島大会への出場権を得ており、コンクール歴から見ればすでにベテランであった。新聞には「奄美勢が2年連続栄冠」という文字が踊った。25日には、島へ帰った中野が、地元の瀬戸内町古仁屋でオープンカーに乗ってパレードをする姿も紹介された。

89年11月11日には、築地、当原、中野の三人の座談会が掲載される。築地はそこでこう言っている。

今度の武道館で、審査員とちょっと話す機会があった。その審査員が「奄美の歌には心がありますねえ。本土の民謡歌手の人たちも、あれを聴いて反省することが多分にあるが、目覚めてくれますかね」と話していた。事実だと思う。民謡に携わっている人たちは、民謡のプロの歌は全然もう聴きたくないという。ちゃんと楽譜があって、プロの三味線、尺八がいて、ちょっとでも崩れると駄目。今度の大会でも青森のプロがゲストで出演したが、洋楽器の伴奏が入って、いつもやっている師匠の三味線と、歌の入りが半拍だけ違う。それで大変苦勞していた。奄美の民謡が強いのは、まず楽譜がない。三味線も一拍延ばそうかが短くしようが、適当に一、二回歌って、クセをつかめば大丈夫。その人自身の歌が歌える。島唄に教室ができて、〇〇流ができて、師匠についてそのままをして、歌の形にピタツとはまらないと師匠が喜ばない。そういうふうになったら、本当の島唄の伝承はできないと思う。律紀ちゃんのように、伸び伸びと自分の歌の世界をつくっていくのが一番いい。それが奄美の歌の新鮮味を引き出す。

築地はまた「今さら毎晩歌遊びする時代ではない」、「伝承も教室などが手っ取り早いだらう」とも語った。奄美の島唄は今のままでいいかという質問に対しては、「今のままでいいと思う。伝承は、当原さんがおっしゃったように、昔と変わらない状態があちこちで残っている。その中から、素質のある人は飛び出てくる」と答え、「島唄教室もこれだけ盛んだし、子供たちも真剣に取り組んでいるから、このままで大丈夫」と太鼓判を押した。

民謡日本一が一気に3人に増えた島唄界は賑やかさを増した。91年11月には、民謡日本一の3人に坪山豊を加えた4人が出演する「ザ・シマウタ special」というコンサートも行われる。このメンバーでのコンサートはその後何度も企画されたが、タイトルからして島唄の新しさを強調したこのコンサートでは、築地俊造がロックバンドと共演するなど、その後の島唄のポップ化の先駆ともいべき試みが見られた(04.10.20)。

92年1月には、中野がプロ歌手になると報じられる(05.1.30)。2月21日には、BMGビクター主催により、地元での旅立ち公演「リッキーふるさと感謝チャリティショー」が行われ、11人の唄者が賛助出演し、千人のファンが詰めかけた(05.2.19)。5月23日には、名瀬の奄美文化センターでも同様の「旅立ちコンサート」があった(05.5.124)。

一方、奄美から三人の日本一を出した日本民謡大賞は、この年、突然なくなってしまふ。新聞は「民謡「甲子園」が消滅 島唄を「全国区」にしたイベント」という見出しでこれを報じ、「背景にはバブル経済の崩壊による広告収入の悪化があるとみられる」と説明した。これに伴って九州・中国大会も消滅したが、鹿児島大会だけは「鹿児島県民謡王座決定戦」と名前を変更して再出発することになった(92.4.15)。

## 歌遊びから教室へ

3人の民謡日本一を出した奄美だが、それを歓迎する声ばかりではなかった。たとえば、91年6月13日に掲載された島唄コンサート「七日間ちやつ続きしまうた会」の紹介記事では、コンサートの企画者の「島唄は急激に変わってきました」という言葉が取り上げられ、「その変わりようとは、名瀬市内でも「島唄教室」という看板が目につくようになったが、そこで学んでいる児童生徒の歌い方で、どこの教室に通っているかがすぐ分かるという。つまり流派の形になりつつある」とあった。

また同年8月には、島唄研究家の片倉輝男が「民謡日本一が三人も出た瞬間に奄美民謡の危機が始まった」という音楽学者の松原武美の言葉を紹介し、奄美民謡は本来

が遊びであり、歌い方も歌詞の選択も自分勝手（ドウカッテ）だったのが、最近はその美点が失われているとして、教室とコンクールを共に批判している（91.8.2）。

歌遊びが衰退してから、島唄を習得する新たな場所として1960年代末から1970年代にかけて登場した島唄教室だが、唄が生活から切り離され、画一化されるという批判も多かった。また教室に

よっては師匠と同じ歌い方を強制するところもあり、島唄の伝統に反すると違和感を表明する人も少なくなかった。

しかし当原や中野が民謡日本一になった頃を境に、新聞には民謡教室の記事が増え始める。特に大笠利のわらべ島唄倶楽部（図4）と喜界島の安田民謡教室の記事は、定期的に紙面に現れるようになる。

中野が日本一になった翌年の93年1月には、大笠利わらべ島唄倶楽部の第二回定期発表会が取材され、7年ほど前に故山田望が子供たちに島唄を教え始め、その後途切れていたのが4年前から「わらべ島唄倶楽部」として再開し、現在は対知広夫、当原秀毅、当原ミツヨが指導に当たっているとあった。記事はまた、発表会には中野律紀から激励の手紙が届いたことも紹介していた（91.1.15）。

同倶楽部の発表会は、その後毎年のように取り上げられるが、十回目となる1999年には、それまでの活動が回顧され、最初のうちは「大人でも習得の難しい島唄を、方言さえしゃべれない子供に歌うことができるのか？」とクラブの存続を危惧する声もあったが、「年を追うごとに会員も増加。八九年の第一回定期発表会を皮切りに、同町内はもとより、群島内各地で開かれる各種イベントへのゲスト出演も多数こなしている。また、毎年笠利校区で行われる八月踊りなど、島唄文化の重要な担い手として期待されている。昨年四月には優良少年少女団体クラブ件表彰を受賞した」とあった（99.1.10）。

同年6月には、小学校五年生のときから大笠利わらべ島唄クラブで指導を受けてきた中村瑞希が、「全九州民謡民舞春季大会」で優勝したと報じられる。記事はまた、中村が前年の奄美民謡大賞で新人賞、その年の同大会でも優秀賞を受賞し、7月には

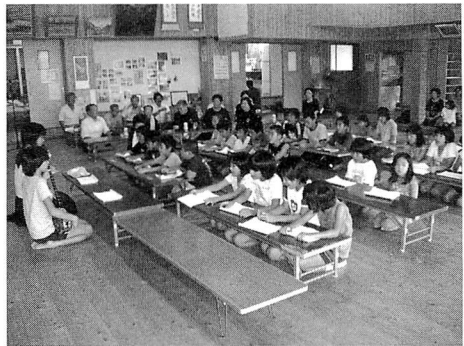


図4 「大笠利わらべ島唄クラブ」の練習風景

県民謡王座決定戦にも出場する予定で、島唄クラブのメンバーにも祝福されているとあった (99.6.7)。

中村は翌2000年の元旦にも、若手唄者のホープとして中孝介と二面にわたって紹介された。そこで中村の母親は、「島唄クラブがあったからこそ今の瑞希があると思います。みんなが後ろから支えてくれるからあの子も心強いのでは」と語っている。

その活動は他の地域の刺激にもなり、同年6月には、瀬戸内町で「わらべヒギャ節クラブ」が活動を開始し、「大笠利わらべ島唄クラブ」の練習を見学して指導の参考にしたと報じられた (00.6.8)。

2002年7月には、同クラブの鹿児島市での発表会の様子が伝えられ、「活発な活動ぶりで知られるクラブだが、奄美外のステージは初めて。これを迎える出身者にとっても、大勢の子供たちの唄に一度に触れられる機会は初めてとあって、用意した四百三十余りの座席は満員。最後は八月踊りの大きな輪を広げて交流した」とあった (00.7.25)。

2003年11月、大笠利わらべ島唄クラブは、地域で地道に優れた活動を展開している青少年団体・グループ、青少年・青少年指導者に与えられる「青少年国民会議会長表彰」を受ける。同表彰は全国の十三団体に与えられたが、九州では同クラブのみの表彰であった (03.11.25)。

一方、「安田民謡教室」は、徳之島伊仙町出身の安田宝英が喜界島で開いた教室だった。1996年元旦、新聞は「島唄は私の人生」という見出しで、安田の活動とその半生を紹介する。そこには、「今月十日で七十歳を迎える喜界町の安田宝英さんは、島の大切な文化である島唄を大切にしたいと約三十年前から仕事の傍ら子供らに島唄を指導している。教え子の中には奄美民謡大賞などで活躍する者も多く、文化伝承者としての安田さんの活動は高く評価されている」とあり、「こちらに来た当初は浜下れなどの行事があっても島唄を歌える人が少なく苦労したが、今は教え子たちが各地で活躍している。ようやく私の思いがかないつつある」という安田の言葉が紹介されていた。

同民謡教室は、同年9月にも「成長著しい喜界のヤング唄者」という見出しで取り上げられ、ジャバラレコードが「奄美しまうた紀行シリーズ」の一環として生徒たちの唄を収録する様子が伝えられた (97.9.12)。

翌98年6月には、「育てた唄者、200人以上」という見出しで、同教室の開設30周年記念コンサートの開催が予告され、前月の第十九回奄美民謡大賞における門下生5人の入賞が報じられる (98.6.20)。このコンサートには、朝崎郁恵、築地俊造、阿世知

幸雄も応援に駆けつけた (98.6.18)。

翌1999年6月の開設31周年の記事では、小学生から七十歳代の大人まで約60人が島唄を学ぶ様子がこう紹介された。

次代を担う子供たちが七割を占め、島唄の後継者育成に力を入れているのが同教室の特徴だ。学生は小学一年から高校三年まで、大人は二十代から七十代までと幅広い。(……) 島唄など郷土の文化が見直されていることもあって生涯学習大会、夏祭り、年一回のチャリティー島唄大会など島内外からの出演以来がひっきりなし。奄美民謡大会がちかづくと練習は一週間休むことなく午後六時から午前零時まで続く (99.6.7)。

同教室は2002年には35周年の記念イベントを開催し、生徒など百人以上が参加して百丁三味線を行ったほか、その年の奄美民謡大賞を受賞した門下生の牧岡奈美や、坪山豊、築地俊造、石原久子といった奄美の代表的な唄者が出演した (02.10.12)。

安田はこの年から徳之島町と亀津にも教室を開き、翌2003年には徳之島で行われた奄美復帰50周年のチャリティーコンサートにも門下生を参加させている (03.5.5)。

## 海外公演

奄美島唄は国内での評価の高まりとともに海外にも進出するようになる。

奄美島唄初の海外公演は、おそらく1981年4月に築地俊造が出場したフランス・レンヌ市の「第8回国際伝統音楽祭」である。新聞は「築地さん世界の舞台へ 仏の伝統芸術祭出場決定」という見出しでこれを報じ、「東京でのアジア伝統芸能交流祭にも出場して、アジアの中での島唄の位置付けも自分なりにわかった。こんどは全世界のなかでどういうランクにあるのか、確認したい」という出発前の築地の言葉を紹介した (81.4.2)。

1986年6月には、坪山、築地、西和美の三人がアメリカ・ワシントンのスミソニアン博物館における「フォークライフ」に出演する。このイベントは、奄美の島唄が「国際的な活躍に道」を開いたと話題になった。翌87年の奄美民謡大賞の出場者募集には「昨年は築地俊造、坪山豊、西和美さんらが渡米、首都・ワシントンで国際的な交流にも参加した。郷土の文化遺産である奄美民謡は、内外で高い評価を受けるようになった」とある (87.4.24)。このとき通訳を担当したアメリカ人女性は、3年後に奄美を訪れ、島唄の印象を「まるでゴスペルソングのような神聖な歌」と語っている



図5 《南海日日新聞》2000年5月13日

公演に「こんな小さな島の歌を世界で歌えることに誇りを感じる。精一杯うたってきたい」と喜びを語った (98.9.2)。

2000年6月には、坪山豊が知名定男やネーネーズらの沖縄のミュージシャンらとモスクワ、パリ、ローマの三都市を回る旅に出る。沖縄サミットに先駆けて琉球文化を紹介しようという企画で、主催は国際交流基金であった (00.5.13) (図5)。同年8月には、貴島康男と中孝介がひと月近く欧州四カ国 (ルーマニア、チェコ、ポーランド、イタリア) で公演をしている (00.7.9)。

2003年には奄美の日本復帰50周年、ペリー来航150周年を記念し、八月踊りや島唄を通じて奄美文化をPRしている「奄美愛しゃ連」が米国ロサンゼルスで公演を行っている (03.7.6)。

その後の公演については省略するが、いまや島唄が海外で歌われるのは珍しいことではなく、記事にならなかった公演も含めれば、その数はかなりのものになるだろう。

それにしても、このように島唄の〈越境〉が当たり前になったのはいつ頃からだろうか。

## 1990年代末からのブーム

一般に奄美島唄が全国区になったのは、元ちとせの活躍が大きいとされる。しかし南海日日新聞を時間軸で追うと、島唄の「脱奄美化」の動きはさらに以前からあることが分かる。

(88.5.29)。

アメリカでは1989年9月にも、築地俊造がシアトル近郊のベルビュー市のジャパンウィークフェスティバルに出演し、島唄を披露した (89.5.10)。また翌1990年には、朝崎郁恵がニューヨークのカーネギーホールで、同ホールの百周年記念事業の一環として「奄美島唄の夕べ」を開催している (90.12.5)。

1998年9月には、朝崎郁恵と石原久子が在キューバ日本移民百周年の記念事業に招待されてキューバを訪れる。二人は途中のメキシコでも公演を行なったという (98.10.11)。石原は初の海外

まず1997年9月に掲載された囲み記事から始めよう。そこでは神戸市長田区にあるコミュニティFM局で鳥唄専門番組の放送を始めた大橋愛由等が、韓国人が奄美の島唄を聴いて「なつかしい」、「済州島の音楽に似ている」とつぶやいた話を紹介し、島唄を東シナ海文化圏のなかに位置づける可能性について書いている(97.9.24)。それに応じるように、同年11月の記事には、大阪でモンゴル国立馬頭琴交響楽団と関西の島唄の会が共演したとあった(97.11.16)。この島唄の会「ユイ・ゆい」は、翌1998年元旦に二面にわたって特集される。記事はこう始まっている。

ふたたび奄美の島唄が注目されている。昨年奄美大島、喜界島で現地録音され、ベテラン唄者から中高生のヤング唄者までを収めた「奄美しまうた紀行」(ジャバラレーベル)シリーズや名人唄者たちのCD発売、キングから発売された「南海の音楽／奄美」など島外で静かなブームが起こっている。盲目で放浪の天才唄者・里国隆(故人)の唄声をブームの火付け役に挙げている雑誌もある。搾取の歴史的背景から生まれた「ディープなブルース」と畏敬の念すら込めて表現する。坪山豊、築地俊造の東京渋谷「ジャンジャン」公演など、島唄が島外で受け入れられている状況は枚挙にいとまがない。大勢の出身者が住む大阪では、かつて関西奄美青年島唄の会を主催した牧志徳さん(43)が島唄の会「ユイ・ゆい」を始めた。中心メンバー約三十人のうち半数は島とは直接縁のない関西出身の若者だ。

島唄の記事はそれまで奄美が中心で、本土の話題でも奄美出身者に関するものに限られていた。それがこの頃から、本土の島唄ファンやアジアなど世界各地を視野に入れた記事が現れ始める。なお先に見た朝崎と石原のキューバ公演はこの年の9月であり、同年11月には先の「ユイ・ゆい」の会の代表が、尼崎で奄美と沖縄の島唄をモンゴルやペルーの楽器と共演させるコンサートを行っている(98.11.27)。

新世代の唄者の活躍も目立った。99年4月には、中孝介と中村瑞希がジャバラレコードからデビューするのを記念して、名瀬でライブが行われた(99.4.2)。また同年4月には、島唄に魅せられて岡山からやってきた女性が、名瀬の石原久子の教室で練習に励む姿が紹介されている(99.4.27)。

5月には、「レコード作り続けて43年」という見出しで、創業者の指宿良彦会長が写真入りで登場し、セントラル楽器が創業以来製作・発売した作品が百枚、千曲を突破したと紹介される。記事は「奄美民謡大賞で幼稚園児が歌うなど、夢にまで見たことが起きている」という指宿の言葉を引き、「四十三年間の労は報われつつある」と

結んでいた (99.5.16)。

7月下旬には、尼崎市で関西奄美民謡芸能保存会の総会および発表会が開催されたが、会場は「島唄ファンなどで超満員」で、「出身者以外からの参加や二世、三世の参加も見られるなど年々輪が広がり、今回は島唄十二、踊り七の計十九教室、三百人が発表した」とある (99.7.29)。

翌2000年元旦には、すでに紹介した中村瑞希と中孝介の記事が二面にわたって掲載される。坪山豊が沖縄のミュージシャンらとともにサミット参加国を歴訪するのはこの年の6月、貴島康男と中孝介の欧州公演は8月である。

9月には、坪山が地域の無形文化財の保存・継承に尽力した人に送られる伝統文化ポーラ地域賞を受賞する (00.9.14)。10月には、東京の島唄ファンが企画した島唄コンサートに貴島と中が招かれ、元ちとせも友情出演をする (00.10.18)。同月、鹿児島伊集院文化会館の自主事業「島唄まつり——奄美の唄者」に、坪山、当原、中、中村の4人が招かれたが、「同会館の自主事業はこれまで、県外の著名な演劇やミュージカル、コンサートなどが主で県内の郷土芸能の舞台は異例のこと」と報じられた (00.10.29)。

11月、坪山が南日本文化賞を受賞する (00.11.5)。12月には「東京は島唄で真つ盛り」という見出しで、在京の奄美出身者による報告が二回に分けて掲載され、坪山のポーラ賞贈呈式や祝賀会の様子をはじめ、東京での島唄関係のイベントが紹介された (00.12.19-20)。またクリスマスイブには、前年から始まった「クリスマスコンサート島唄ライブ」が奄美空港を賑わせた (00.12.25)。

翌2001年1月13日には、名瀬で島唄とアイヌ古式舞踊の共演があった (00.1.14)。同月にはまた「本土で高まる島唄熱」の見出しで、「二十一世紀は奄美から」と銘打たれた島唄コンサートが東京で開かれることが予告され、「本土での島唄ブームは年々高まっており、今年もいろいろなイベントが予定されている」とあった (00.1.17)。

3月には東京で「坪山豊の世界」と銘打ったコンサートが行われたが、主催は島とは縁もない東京の島唄ファンであった (01.3.7)。同月には、埼玉在住の北海道出身の女性が阿世知三味線教室で島唄を学ぶ様子も紹介されている (01.3.27)。

2002年元旦の新聞では、1998年にライブハウス「ASIVI」をオープンさせた麓憲吾が特集される。麓は前年2月に、若手の唄者とともに若い人に島唄の魅力を伝えようと「夜ネヤ、島ンチュッ、リスペクチュッ!」というイベントを企画し、島唄関係のライブとしては異例とも言える成功を取めた。記事には「若い子が島唄のコンサートに足を運んだり、飲んでいる席などで自然に三味線弾いて歌えるようになったら本



物]、「島の新しい文化の創造や島おこしを政治家やお役所に頼るのは間違い。それよりも個人の頑張りで支えられている部分がいっぱいあるはず」という麓の言葉が紹介されている。

同年1月27日には、東京でも「夜ネヤ、島ンチュツ、リスペクチュツ in Tokyo」が行われ、RIKKIや元ちとせ、ハシケン、貴島康男、朝崎郁恵など十一組のミュージシャンが出演し、20代から30代を中心に若い聴衆が集まった (02.1.30)。

島唄をめぐる新しい動きは、90年代末から奄美のみならず全国へと広がりつつあった。2002年になって起こる元ちとせブームは、いわばこの土台の上で花開いたものだったのである。

## 元ちとせ以後

中学一年生で初めて奄美民謡大賞に出場した元ちとせは、南海日日新聞にも早くから登場している。たとえば、1993年3月に瀬戸内町で開催された「第三回ヒギャ節発表会」の記事には、古仁屋中学校2年の元による「嘉徳なべかな節」で幕を開けたとあり、「中野律紀2世として将来を期待される古仁屋中学校2年の元ちとせさん」というキャプションが付いた写真が掲載されている (93.3.28)。1995年3月には、セントラル楽器から発売される島唄カセットテープ「元ちとせ・15歳ひぎゃ女童(めらべ)」の告知記事も出る (95.3.31)。

翌96年、元は高校生として初めて奄美民謡大賞を受賞する。新聞には短髪の元の写真が掲載され、「元さんの歌唱力は完成されたものだった」という審査委員長の講評が紹介された (96.5.12) (図6)。新聞はその後も元について、同年6月の喜界島の「島唄大会」への招聘 (96.6.17)、12月の徳之島・天城町における第二回「島唄の夕べ」への出演などを伝えているが (96.12.23)、翌年元が高校を卒業して島を離れると、その名も紙面から消える。

その元が久々に紙面に現れるのは、2002年元旦の特集記事である。「元ちとせ 今春メジャーデビュー」と題された一面に及ぶその記事は、こう始まっていた。



図6 《南海日日新聞》1996年5月12日

郷土文化への再認識が叫ばれて久しい中、今再び若者たちの間で「鳥唄」が脚光を浴びている。貴島康男、中孝介、中村瑞希などの若手唄者を筆頭に、現在も「鳥唄を聴きたい、学びたい」とその世界へ足を踏み入れる若者は後を絶たない。また、鳥唄の奥深さに魅了され、奄美を訪れる島外出身者も少なくない。そんな中、RIKKIや里アンナなど鳥唄を原点にポップスへ転身し、全国へ活動の幅を広げる新たな動きもある。瀬戸内町出身で奄美民謡大賞受賞者の元ちとせさん(22)もその一人だ。今春のメジャーデビューを前に、自らの新たな可能性に懸ける姿を追った。

翌年2月に発売された元のデビューシングル「ワダツミの木」は、4月にオリコンでトップになる。南海日日新聞は「奄美の歌姫、オリコン一位に」という見出しでこれを大きく報じ、鳥唄の若手から全国的な実力派シンガーへの道を歩み始めた元を「奄美初の快拳」と称えた(02.4.18)。名瀬の奄美本通り名店街には、セントラル楽器の呼びかけで、これを祝して「元ちとせと共にかんぽろう」という横断幕も現れる(02.4.26)。

5月18日に行われた第23回奄美民謡大賞では、元と同様に十代で大賞を射止めた牧岡奈美が、「ちとせ姉ちゃんのお陰で鳥唄の良さを多くの人が理解するようになった」と元の活躍に言及し、「上京して音楽の道を目指したい。(……) 詞を書くのが好きで最近では作曲もしている。ちとせ姉ちゃんのように鳥唄を基礎にして、私なりの道を探っていきたい」と将来の夢を語った(02.5.26)。

ちなみにこの大会のパンフレットの裏表紙には、「セントラル楽器は元ちとせを応援します」「セントラル楽器は元ちとせを応援します」という言葉とともに元の写真二葉が掲げられ、「ワダツミの木」がオリコンで一位になったことへの祝辞が記された(図7)。

元の活躍に関しては、その後もセカンドシングルの発売やテレビの特集番組の放映(02.5.23)、関西の情報誌における特集とそれに合わせた鹿児島県の観光キャンペーン(02.6.25, 27)などが逐一取り上げられるが、7月には元を昇曙夢と比較する記事までが登場し、「ちとせの歌声のベースには、いうまでもなく鳥唄があるのであるから、ちとせ



図7 第23回奄美民謡大賞パンフレット(裏表紙)

の歌声が賛美をあげるといふことは、奄美の島唄が全国の人々から賞賛を受けることになったことと同義なのである」(02.7.24) とその活躍が称えられた。

8月に入ると、鹿児島県のCDショップ・十字屋で島唄コーナーが設置されたことが報じられ、責任者の言葉が紹介されている。「元さんの最近のヒット曲から入って元さんの島唄、他の唄者の島唄へとお客の興味が深まっていくのが分かる。その影響は沖縄関係のCDにまで現れている」、「まさにアイランドブーム。応援しようとディスプレイしたスタッフの気持ちと音楽ファンの志向が共鳴している状態。このまま応援しつづけ、さらに盛り上げていきたい」(02.8.5)。

この年は島内外での島唄イベントの記事も多かった。まず2月にライブハウスASIVIで朝崎が自身のアルバムの発売を記念してのライブがあり、地元唄者も出演したとある(02.2.19)。3月7日には、同じASIVIで名瀬市内の高校を卒業した若者百人を招待して、「夜ネヤ、島ンチュッ、リスペクチュッ!」が開催され、島唄の若手唄者に混じって元も出演する(02.3.8)。ASIVIでは3月17日にも楽曲を提供したハシケンがライブを行い、中村瑞希や吉原まりかなどの若手唄者が、ポップス風にアレンジした民謡を披露している(02.3.19)。ASIVIでは6月にも島唄のレコード製作会社が企画した「じゃばら祭り」が行われ、若手唄者が多数出演し、バンドによる洋楽器の島唄もあった(02.7.1)。

8月には、東京で貴島と中が行なった島唄イベントが紹介され、「会場には買い物客の主婦に交じり、若い女性たちの“追っかけ組”もいて、昨今の奄美島唄ブームの盛り上がりを実感させた」とある(02.8.17)。8月17日には、この二人に築地や朝崎や若手の中村、牧岡らを加えて、東京のよみうりホールで「奄美フェスティバル」が行われる。記事は「島唄と洋楽器が融合」と見出しを掲げ、「最近の奄美島唄ブームを反映してか、聴衆は本土の人や若い人が目立った」とあった(02.8.27)。元の活躍や若手唄者の登場は、島唄をポップ風にアレンジするという方向に拍車をかけていった。

紙面ではジャズピアノを取り入れた朝崎郁恵のアルバムや、島唄にギターや打楽器を加えたRIKKIのアルバムなど、洋楽器を取り入れた島唄の新しい試みが活発に紹介される(02.9.25)。8月28日の記事では、岩手県出身の21歳の歌手志望の女性が、金髪にジーンズ姿で名瀬で熱心に島唄を習う姿も伝えられる(02.8.28)。

9月22日には、坪山豊らが鹿児島県の石橋記念公園でコンサートを行い、主催者の予想を上回る千六百人の聴衆が集まった(02.9.24)。坪山はまた10月27日、祖父の郷里である東串良町の町制70周年記念祝賀会にも招かれる。企画のきっかけとなった県職員は「全国的にブームを呼んでいる島唄の第一人者のルーツが東串良にあることを

多くの町民が知らない。まして島唄を生で聞くのはほとんどの人が初めてだと思う」と語った (02.10.28)。

10月26日、NHK大阪ホールで名瀬市などが主催する「島唄フェスタ」が開催され、若手からベテランまで奄美の代表的な唄者が出演した。「関西で名瀬市が主催する大規模な島唄フェスタは十一年ぶり。関西在住の出身者らが大勢押し寄せ、千四百人定員のホールはほぼ満席になった」という (02.10.29)。

クリスマスイブには、坪山、築地、当原ら唄者9人が奄美空港で恒例の島唄ライブを行い、約300人の帰省客や島唄ファンで埋め尽くされ、立ち見も出るほどであった。それを伝える記事はこう始まっていた。「世界に誇る奄美の島唄を全国に発信」 (02.12.25)。

奄美の日本復帰50周年に当たる記念の年となった翌2003年は、島唄関連のイベントが目白押しだった。主なものを挙げよう。1月には唄者の大御所4人による文化講演会が行われる。「国内外で高い評価を受けている奄美島唄の可能性を語る」のが目的だと記事は報じていた (03.1.10)。2月15日には奄美パークで復帰50周年を記念した島唄コンサートが行われ、その模様はNHKでも放映された (03.2.13, 16)。3月にはフォーク歌手の加川良が中村瑞希らの若手唄者と名瀬市で共演する (03.3.8)。

4月18日には東京で、復帰50周年を記念した奄美フェスティバル03が開催される (3.4.22)。5月には、徳之島で阿田民謡教室の主催による復帰50周年を記念するチャリティーコンサートも行われた (03.5.5)。5月と7月には、東京で島唄のベテランと若手がジャズやレゲエのミュージシャンと共演している (03.3.17)。

6月には千葉で市民の手作りによる石原久子のコンサートが行われ、予想を上回る大勢の観客が詰めかけた (03.6.5)。同じ6月には沖縄でも、復帰50周年の記念式典に合わせて、沖縄奄美連合会の主催による島唄フェスタが行われた (03.6.10)。

7月は先に紹介した「奄美愛しや連」による米国公演。9月は2日にわたって、復帰50周年記念ライブ「夜ネヤ、島ンチュ、シルベクチュ!!」が奄美パークで行われ、元ちとせや朝崎郁恵、ハシケンなど島内外のアーティストが参加した (03.7.23)。

10月は名瀬で「奄美。沖縄島唄フェスティバル」 (03.10.10)、11月には奄美パークで島唄とアイヌ音楽の競演が行われた (03.11.25)。12月には鹿児島で奄美出身者による手作りの「奄美しまうたの祭典」 (03.12.5)、県文化振興財団による復帰50周年特別企画「しまうた」が開催された (03.12.23)。

なおこの年には、坪山豊が県民表彰を受賞している (03.10.15; 11.5)。坪山は翌2004年3月の天皇陛下の古希の祝いにも出席して島唄を披露した (04.3.16)。

## 歌掛けの復活、そしてこれから

ここまで駆け足で見たように、元ちとせのメジャーデビューから奄美日本復帰50周年に沸いた2年間は、おそらく島唄がその歴史において稀に見る活況を呈したときであった。それは円熟期を迎えたベテランに、コンクールで育った実力のある若手が合流し、さらに時代の流れという追い風が手伝った結果であったと言えよう。

実際、これを機に島唄の認知は島外でも島内でも格段に進んだ。いまの島唄には、その継承を懸念させる要素はどこにもないように思える。しかし実はひとつ大きな問題がある。それは島唄の実質をなす島ぐちの衰退である。

島ぐちはいま「座して死を待つ」という状態であるといっても過言ではない。たとえば、沖縄のウチナーグチ復興運動と比較すれば、その差は歴然としていよう。しかも歴史的な文脈から見て、奄美において島ぐちの復興運動が沖縄並みに盛り上がることはまずあり得ない。

では、島ぐちは将来どうなるのだろうか。最も可能性があるのは、おそらく唄とともに生き残るという道だろう。実際、このことはかなり前から議論されていた。たとえば、奄美民謡大賞の開催と同じ昭和55年、島ぐちの継承を目指して、「島ぐち発表大会」が行われるが、その第一回大会開催の前日の新聞に、「奄美方言を語る」と題して大会の審査員ら6人による座談が掲載されている。その一部を引こう。

秋田 (……) 方言がだんだんなくなっていく。それに従って古い民謡もなくなっていくんじゃないかと。私にはそんな気がするんです。

楠田 ただ民謡というのは郷土芸能の古典的なものとして残る可能性が強いんじゃないでしょうか。

秋田 古典民謡はもちろん、いつまでも残していかなければならない文化遺産ですが、それのもととなる方言が残っていくことによって、なお唄が確かに残っていくということなんでしょうね。

恵原 (……) しかしまあ、大まかにいって八月踊りや、島うたが続く限り、島ぐちはある程度残るとは思います。

島ぐちはこの頃から、その将来を島唄と関連づけて語られていたのである。しかも客観的に考えて、島ぐちの守り手として唄者以上に相応しい人材はいないだろう。島唄が島ぐちを歌詞とする以上、島唄教室が同時に島ぐち教室も兼ねるとするのは、本

来きわめて自然なことであるはずなのである。にもかかわらず、そうはならなかったのは、よく言われる奄美における島ぐちの多様性も一因だろうが、それ以上に島唄の習得に必ずしも生きた島ぐちの習得を必要としなかったことが大きかったのだろう。とはいえ、この関係にも近年変化の兆しが見える。そのひとつが歌掛け復活の動きである。

奄美島唄の原点が歌掛けにあるということは以前から言われてきた。しかしその伝統の再興が真剣に議論されるようになったのは、2004年6月の「奄美歌掛け文化保存会」の発足が大きい(04.7.1)。この会の発起人の一人である三上絢子は新聞に一文を寄せ、「私が危惧しているのはシマウタの原種である「歌掛け」が衰滅の一途をたどっていることである。伝統は一度壊したら修復は困難である。先人たちから伝承された文化的に貴重な歌がけを残すため、例えば集落ごとの特質を生かした「歌掛けの催し」などは考えられないだろうか」と書いた(04.6.15)。

坪山豊もまた、『奄美歌掛け文化保存会』に寄せて」という一文を寄せて、「奄美の宝であるシマ唄文化を一層翔かせるため、その多様性と裾野拡大を取り戻し、保存・継承していかなければならない」と関係者の協力を呼びかけた(04.7.15)。同年12月1日には「奄美歌掛け文化保存会」の設立総会があり、会長の山田薫が「島唄がはやる一方で歌がけや歌遊びの原点が忘れられてきた。コンクールの隆盛と平行し、ウッチュンキヤ(年寄りたち)の歌掛けを認識してもらえれば地域の活性化にもつながる」と述べた。

保存会はその後毎年「歌掛けの夕べ」という催しを行っている。その効果か、島唄を「歌掛け」という観点から見直そうという試みが盛んになっているようだ。島唄関係のイベントで歌掛けが強調されることも珍しくなく、最近ではステージの方でも島唄を歌掛けの形で披露しようと、島の若手唄者を中心にいろいろな試みが行われている。コンクールに代表される、いわば個人プレーとしての島唄がひとまず行くところまで行ったところで、再び島唄の原点を見直そうという動きが現れてきたということだろうか。あるいは、しばらく普通の日本民謡と同じ土俵で勝負をして自信をつけた島唄が、ようやく自らの独自の伝統に目を向け始めたということなのかもしれない。

いずれにせよ、歌掛けが島唄の学習のなかに自然に組み込まれるようになれば、島唄を学ぶことは、単に決まった歌詞を覚えることから、島ぐちによる生きたコミュニケーションの習得へと変わってくるだろう。

この歌掛け復活の動きが、島唄と島ぐちの関係にどのような影響を与えていくのか、今後に期待したいと思う。